

三十三 偉大な師への手紙

師よ、あなたの『純粹理性批判』と『実践理性批判』とを再読しました。わたしの理解が不十分なことはわかりきったことですし、当代の優れた人たちのような目覚ましい解釈を得たわけでもありません。それに、哲学書を読んでも「はたから与えられた歴史的な認識にしか到達できない」、「哲学は、学習できるものではなく、哲学においては、理性に関する事柄をせいぜい哲学的に思索することを学び得るだけである」、というあなたの訓戒があります。わたしが思索してもきつと、哲学的な思索から遠いことでしょう。それでも、あなたの言われるように、「理性の本性」がわずかな理性しか持ちあわせない者にも思索を促します。いくつか考えたことを、問いかけのつもりで書きとめてみます。

世界を知ろうとするのに、まず人間の認識がどのようなものかに着目されたあなたの慧眼はやはり感歎すべきものです。今も、しばしばこの出発点に立ち戻る必要があると思います。わたしたちのもつ感性・悟性・判断力・理性を精確に区別してその働きを識ること、それによって直観・認識・判断・推理その他を正しく働かせること、概念の形成や構成・

総合などの論理の運用を誤らないことなどなど、事物を認識するのにわたしの注意しなければならぬことが数多くあることを識られます。あなたは、人間が感性によって現象を直観するときすでに空間と時間という形式に従っているとされ、悟性にすでに備わっている体系を形づくる論理形式Ⅱカテゴリーに従って認識するのだ、とされます。しかもそれらの能力は、どんな事物かを経験する前にもともと人間に備わっているとされます。

あなたの「コペルニクスの転回」のかなめにあるこの先験的認識の考え方は、人間の認識を確実に論じるための方法だとわたしには思われますが、まちがっているでしょうか。あなたがニュートンの力学の成功を知って哲学の道に進まれたと聞いて、そう感じるのです。初期の天文学にかかわる仕事で、星雲から太陽系が形成されたと考え、銀河系は重力による恒星の集合で円盤状だろうと推論されたと聞けば、あなたは批判哲学的方法的足場として観念論的考察から始めたといっそう感じます。わたしには、自然の研究に踏みこむことは、モノ自体は結局のところ認識できないと考えるにしても、「人間の認識が現象を構成するのだ」とする立場を超過する意欲を含んでいると思えるからです。

残るところなく取り上げ綿密に論じるすべてをわたしはとて把握しきれませんが、あなたは実在を否定されないのですから、原理論の第一部門「先験的感性論」は、観念論的

な言い方をやめて唯物論的にとらえなおせば、現代の自然科学者にも受け入れることができるでしょう。第二部門「先験的論理学」も、アンチノミーのところまで語り尽くされたあとでは、それ以前の人たちの求めたことのどこに問題があったかが明らかです。確実な認識には限界があつて理性は経験を超えることができないという結論に、真つ向から反論できる人はいないでしょう。啓蒙の時代は進展して、人間の知性はあなたの議論の指し示す方向に向かったのだと思います。これ以後、あなたの考察をさらに進展させる必要があると考えた哲学者たちを例外として、多くの知性的な人々の考察は経験につながるテーマの議論や学問に向つた、とするのは言いすぎでしょうか。

しかし、あなたは、古来賢人たちの尊重した理念がアンチノミーに終わるといふ結論で切りあげることができませんでした。因果の系列としてある世界（自然界、経験界）で、すべての系列をさかのぼって認識し尽くすこと、それは理性のやむにやまれぬ欲求です。とりわけ整然としたあなたの知性は、考察の全体が完全であることを求めずにはいません。その極限まで行き着けないことを証明したばかりなのに、あなたは、知識の体系をどこまでも遡及する人間の営みを補完するために、統整的原理を要請します。

それは、あなたの言われるように可想的なものだと思いますが、あなたにはすくい取ら

なければならぬものがあつたのです。人間は、真に生きるために、自分の行為を自由に選ぶのでなくてはならない、誰もが心のどこかで思い描いていることです。この理想は、必然性が貫いている自然（人間を含む）において、どのようにして可能になるか。あなたは、経験的自然から遊離せずに人間の実践を見つめます。人は意志して行爲します。その意志を、自然の何ものにもとらわれずに決定できたら、それが人の望みうる自由である。ただし、その意志は各人にかつてなものであつてはならず、万人に普遍的な原理に則つたものでなくてはならない。こうしてあなたは、自由と表裏をなす道徳的法則を提唱します。この法則は、自然の必然性を失効させてはいけませんから、自然にかかわる実質を伴わない形式的な法として宣言されます。これが、不十分ながらわたしにできた理解です。わたしは、ここまでのあなたの考えをすべて受け入れます。あなたが定言的命法で定式化された道徳法則、

君の意志の格率が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当するように行爲せよ。を義務としましょう。これに信を捧げましょう

*

哲学者としてのあなたは、ヨーロッパの哲学者たちの理念を見棄てることができませぬ。因果の系列を無限にさかのぼって知るための心の不死、完全な自由をもつ叡智者もしくは因果の系列である世界を創った根源者まで考え尽そうとします。さまざまに説いて、不明なわたしに得心させようとしているかのようです。でも聡明なあなたは、それらの理念が、道徳的法則をよく実現するための要請以上のものだとは言われませぬ。後代の伶俐な者がこの議論をさらに続けなくなるだろうことを、徳を求めてやまないあなたには、考えるいとまもなかったのでしょうか。

ご本を読んでわたしは、スピノザの名を一か所しか見つけることができませぬでしたが、あなたのつきつめた考察がどこかしらスピノザの思想に近接したところをもつと感じました。インターネットでその関連を調べたら、西洋にも日本にも関連があると考える人がないわけではありません。でも、批判書完成まであなたは『エチカ』を読んでいなかったというのが定説のようです。あなた方の心性が似ているせいでそう感じたのでしょうか。

あなたのあと、あなたの考察を発展させようと、とくにドイツで、ヘーゲルをはじめ名だたる哲学者たちが続きました。スピノザがその人たちに手がかりを与えた、という見方があるようです。わたしの拙い理解では、ヘーゲルは、あなたが細心の注意をはらって議論した理念を、歴史哲学などで復権したように感じていました。実際に、二十世紀のドイ

ツの哲学者E・カッシーラーが、あなた以後を詳しく跡づけて議論した『認識問題』で、ドイツ観念論の人たちが、統整的原理が要請だということを忘れて、理性の限界を超えたと論じています。こう判定すると、あなたがまだ形而上学と呼ばれた哲学から自然科学などの分野を分離してしまえば、哲学をそれ自体として考察する人が減ったのもうなずける気がします。もつとも、現代でもわたしたちは、あなたの綿密な議論を自分のもののできずに、しばしば迷妄に陥り、当面する課題に真剣に取り組むときでさえ誤るのです。哲学的に考えることはなお必要ですね。

*

最後に、批判がましい質問をすることをお許し下さい。あなたは、人間が現実にとのよ
うな行為をすればよいかという間に道徳的法則をもって答えられたのに、さらに、心の不
死や神について考えられました。それは、極東の凡夫には、あなたがヨーロッパ文明の中
で、誰よりも徳と善を求めて生きられたからだと思われれます。しかし人間の歴史上、考え
ぬいた上でそのような理念を断念した人がいます。インドの古い書物に、仏教成立以前の
ゴータマ・シッダールタの言葉が断片的に納められています。この人もあなたのように、
理性の限界を超えようとはしなかったと考えられます。しかし、因果の系列を無限にさか

のぼることは断念しました。世界が時間的あるいは空間的に無限か有限かを論ぜず、不死の靈魂や世界の根源者について沈黙を通しました。のちに宗教となつた仏教を離れて考えれば、ゴータマ・シッダールタの断念は、極めて困難な道ではありますが、人間の実践的な生き方として成立するのではないのでしょうか。乏しい理性のわたしには耐えられないほど不安定な在り方ですが、この道しか選ぶことができません。もしも可能だつたなら、あなたの励ましの言葉を聞きたいのです。

*

あなたの生きられた啓蒙の時代を二百数十年過ぎて、人間の智慧は進んだのでしょうか。人間の行動の仕方や社会的な在り方についてはいっこうに改善がみられません。あなたが、あなたをわたしたちは真実だろうと考えます。あなたの据えられた観点はそれによつて無意味にされはしないでしょうか。現代の宇宙論・生命論を包み込んでどのような認識論と理性批判を展開されるか聞いてみたい気がします。いずれにせよ、考えるときはいつも、「残されている道は、批判的方法だけである」という言葉を忘れないようにします。

再びあなたの考えられたことを聴いて、前よりも霧が晴れたように思います。しかしやはりわたしは、果てを知らない海原にいるのだと覚悟しなければなりません。満天の星々はどの道を進めと具体的に示すものではありませんね。ただわたしの選ぶ進路が命法に従っているか考えながら進むしかありません。あなたの忠告を灯として、ただ独り歩む勇気が保てますように。

二〇一五年、菊の花開く候

わたしのカント解釈は、唯物論の立場から読み替えるものである。前の稿にはカントの観念論的な前提を支持することになってしまいう文が二、三あったので、それを修正した。

二〇一六年、八月